

心の輪を広げる体験作文 一般部門 ◆優秀賞

「どうしてお胸に傷があるの?」

かすや のじこ
粕谷 法子

大動脈縮窄複合症です。今夜が山だと思ってください」一瞬、目の前が真っ暗になった。ここはドラマの撮影現場なんだ、これは夢なんだ。私は何度もそう願った。

私には、生後6カ月の娘がいる。生後2週間目のある日、娘の様子がおかしかった。ミルクを一滴も飲まなくなり、病院へ連れて行くと心不全を起こしており、心臓が止まる一歩手前だった。大動脈の一部が細くなり、血液の流れが滞る。心室と心房に穴が開いている、心室中隔欠損と心房中隔欠損も合併していた。緊急でPICUへ入院、1週間後に手術をすることが決まった。私自身は、幼いころから風邪もめったにひかず、けがもほとんどしたことがない。走ることが大好きで、陸上部に所属し、今でも趣味のランニングを継続している。病院に縁遠く、まさか自分の娘に大きな病気があるとは考えてもみなかった。

たくさんの医療スタッフの皆様のおかげで娘の命は繋がった。夜中、家に帰ってからも夫と病気について調べた。どうか

病院から連絡がありませんようにと祈りながら。翌日から、毎日通院し、面会する日々が始まった。娘は、手術をするまでは心臓に負担がいかぬよう、まどろむお薬で眠っていることが多かったし、たくさんの方の管や点滴をつけられて痛々しい姿だった。そんな姿でも、いとoshii娘に会うことが楽しみで、毎日面会時間の1時間前については「早く会いたいなあ」と感じていた。それと同時に、いつも感じていたことがある。「どうか、悪化していませんように」。毎日毎日、まどろんでいる娘に「今日も来たよ！元気？」「お天気がいいねえ」など、前向きに明るく接していたが、手術の2日前に、不安や申し訳なさが押し寄せてきて初めて病室で涙を流してしまった。もうすぐで産まれて1カ月なのに、家でお祝いをしてあげることができない、健康に産んであげられなくてごめん、苦しい思いをさせてしまったごめん。様々な思いが溢れてきた。病室では娘だけでなく、たくさんの方の子どもたちが痛みや苦しみに耐えて頑張っている。そして、ご両親もみんな一緒に闘っている。そんな中、子どもの前で絶対に泣くものかと食いしばっていたのに、涙は次から次へと流れて止まらなかった。そこに、看護師さんがそつとやってきて「お母さん、大丈夫ですか？怖いですよ」と声をかけてくれた。病棟医の方も声をかけてくれ、お薬

の影響ですっと眠っているように見えるが、とても元気で実は午前中もよく動いていたと今の状況を伝えてくれた。また、生後1カ月が近いので、手形と足形を取って写真を添えて記念のカードまで作成してくれていたのだ。病室内は、保護者の写真撮影禁止だったので、このようにスタッフの方が温かく娘の成長と頑張りを見守り、親の気持ちにも寄り添ってくれたことが嬉しくてまた泣いてしまった。

娘の手術当日。朝の8時にたくさんのスタッフの方に付き添われて、娘は手術室へ向かっていった。あるスタッフの方が娘の手を取って「頑張ってくるよ！」と手を振るような仕草をしてくれた。「お母さん、大丈夫！心配しないで」と娘が言ってくれているような気がした。結果、手術は成功し、経過も大変よく、目覚ましい回復を見せてくれた。

私は、大学を卒業してから約7年間、小学校の特別支援学級で教員として勤務をしていた。たくさん子どもたちや保護者の方に、丁寧に支援をして少しでも生きる楽しさを伝えられたらと感じていた。自分の娘に心疾患が見つかり、もしかしたら将来何かのハンデを負うかもしれない。経験や知識があってもこんなに不安で怖いものなのかと感じた。ただ、娘に疾患があったことで知ったことが一つある。それは、「なあんだ、世の

中の人たちって助けてくれるんだ」ということだ。病院では、内科の先生がいつも丁寧に診察をして問題点や改善点を教えてくれる。執刀医の先生は、「お母さん、心臓は治したよー!」と勇気をくれた。看護師さんたちは、私の心のケア、娘の体調管理や温かい声かけなどで、常に近くで支えてくれた。ミルクを一切飲まなくなったとき、保健センターの保健師さんに電話で相談し、真摯にアドバイスをくれたし、その後も定期的にご連絡いただき、娘の体調や私の精神面の様子を聞いてくれた。また、同じ病室でいつも顔を合わせていたお母さん達と声を掛け合いながら、戦友として子どもとともに病気と闘ってきた。友人や親族、昔の教え子の保護者の方も常に連絡をくれて支えてくれる。月に1度の外来では、名前も知らない方たちが笑顔でバスにベビーカーを乗せるのを手伝ってくれたり、声をかけてくれたりする。そうか。困ったら助けてもらえばいいのだ。当たり前前のことのように、今までその素晴らしさに気が付かなかった。

先日、駅の場所がわからないと道行く人に声をかけつつも素通りされている白杖をついた男性がいた。私はたくさん助けてもらった。たくさんのお優しいさと勇気をもらった。こういう気持ちや行動は、循環させるべきなのだ、全身に血を巡らせて命を

つなぐ心臓のように。声をかけ、楽しく娘の話などをしながら無事に駅に到着した。

娘が大きくなったら、必ず言うだろう。「どうしてお胸に傷があるの?」と。その時には伝えたい。心臓に病気があって、たくさんの方があなたの命を繋ぐために頑張ってくれたこと、私と夫があなたに「生きてほしい」という願いを込めたこと、そして何よりあなた自身が「生きたい」と強く願って手術に耐えたこと。命の重さには差がないけれど、この胸の中にはたくさんの方の優しい気持ちがぱんぱんに詰まっていて、とても重たく、それはとても誇らしくて素晴らしいこと。そして、いつかあなたも必ず、誰かの心の支えになれる、ということ。